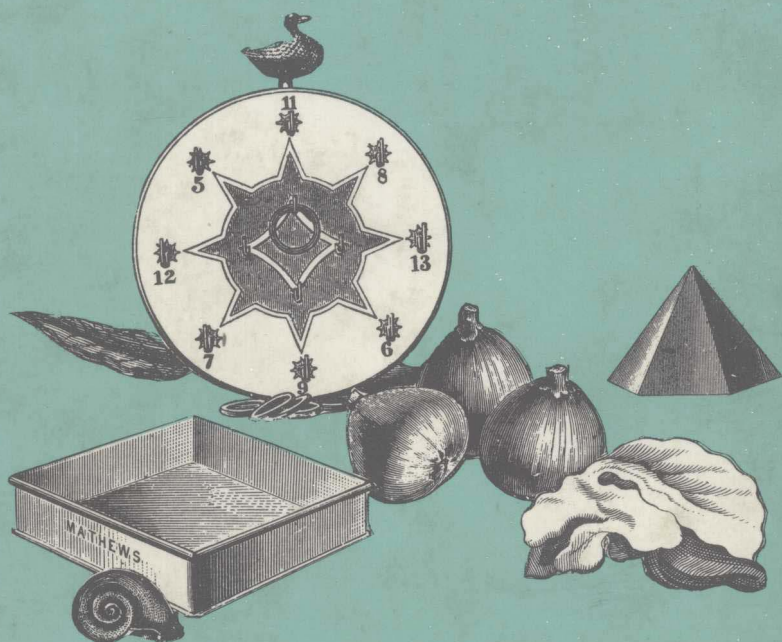


ことばの食卓

武田百合子 画・野中ユリ



作品社

卓食のばこと

武田百合子 画・野中ユリ



作品社



©Yuriko Takeda,
Printed in Japan, 1984.

ことばの食卓

一九八四年二月二五日第一刷発行
一九八五年三月五日第二刷発行

定価二二〇円

著者 武田百合子

挿画 野中 ユリ

発行者 大村 勇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒〇三 電話(〇三)六二一九七五三
振替口座(東京)六二七一八三

本文印刷 シナノ印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)

ISBN 4-87893-107-8 C0095

ことばの食卓——目次

花 の 下	雛 祭 り の 頃	お 弁 当	キ ャ ラ メ ル	続 牛 乳	牛 乳	枇 杷
63	53	43	33	23	13	7

怖いこと

73

誠実亭

83

夏の終り

93

京都の秋

103

後樂園元旦

113

上野の桜

123

夢、覚え書

133

挿圖・装丁——野中ユリ

ことばの食卓

武田百合子

枇 杷

枇杷を食べていたら、やってきた夫が向い合わせに坐り、俺にもくれ、とめずらしく言いました。肉が好きで、果物などを自分から食べたがらない人です。

「俺のはうすく切ってくれ」

さしみのように切るのを待ちかねていて、夫はもどかしげに一切れを口の中へ押し込みました。

「ああ。うまいや」

枇杷の汁がだらだらと指をつたって手首へ流れる。

「枇杷ってこんなにうまいもんだったんだなあ。知らなかった」

一切れずつつまんで口の中へ押し込むのに、鎌首をたてたような少し震える指を四

本も使うのです。そして唇をしっかり閉じたまま、口中で枇杷をもごもごまわし、長いことかかって歯ぐきで噛みつくしてから嚥み下しています。歯ぐきで噛むということとは顔の筋肉を歯のある人より余計上下させなくてはならないので大へんなことです。唇のはしに汁がにじみます。眼尻には涙のような汗までたまっています。

そうやって二個の枇杷を食べ終ると、タンと舌を鳴らし、赤味の増した歯のない口を開けて声を立てずに笑いました。

「こういう味のものが、丁度いま食べたかったんだ。それが何だかわからなくて、うろろと落ちつかなかった。枇杷だったんだなあ」

徹夜をしたあと、いましがたまで書いていた原稿があがったところでした。長椅子に横臥して、枇杷の入った鳩尾みぞおちに手を置いて、柔らかな顔つきになって、すぐ眠りはじめました。

どうということもない思い出なのに――。丁度食べたかったものを食べていたりすると、梅雨晴れの午後のその食卓に私は坐っています。

あの手の形は……、父親ゆずりなのだと、言っていました。もの書きの手というより、篤実な農夫か、田舎寺の坊様の手なのかもしれない。節が高くて短い指は、先がばち形にひらいていました。緊張すると手が震えるのは小学生の頃からだ、と言っていました。だから、ものをとり押えようとすると、ことさらかまえて螻指になるのです。しがみつくように万年筆を握りしめ、書物を繰るときは、先ず按摩のように撫でまわしました。

皺ぶかくニス色をした手の甲が柔らかくて、白い掌や指先が湿っていて「ゴムみたい。黒ん坊みたい。吸盤があるみたい」と、私はいつも思っていました。

向い合って食べていた人は、見ることも聴くことも触ることも出来ない「物」となって消え失せ、私だけ残って食べ続けているのですが——納得がいかず、ふと、あたりを見まわしてしまう。

ひょっとしたらあるとき、枇杷を食べていたのだけれど、あの人の指と手も食べてしまったのかな。——そんな気がしてきます。夫が二個食べ終るまでの間に、私は八個食べたのおぼえています。

牛 乳

